

中国古代の髪型に関する考察： 漢代における女性の髻の流行

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪樟蔭女子大学 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 夏子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4423

中国古代の髪型に関する考察 —漢代における女性の髻の流行—

学芸学部 化粧ファッション学科 水野 夏子

要旨：本研究では、中国古代の髪型において髻の基礎が築かれたとされる漢代に焦点をあて、女性の髻の特徴を明らかにし、後代への影響について考察することを目的とした。正史、詩詞、小説などの文献史料をもとに、漢代の女性の髻の名称や種類、形態、使用者などを整理・分析し、後代の女性の髻との比較・考察を行った。文献史料からは、漢代の女性の髻は14種類確認された。「神仙髻」「飛仙髻」「乗雲髻」は、神仙思想を反映し、昇仙信仰が隆盛を極めた漢代を象徴する髻である。漢代で平素の装い、庶民や夷狄の髪型とされた「椎髻」は、唐代では胡風趣味に採用され、宋末から元では蒙古族の女性に用いられ、漢代から変わらず異民族の髪型として認識されている。唐末にかけて「椎髻」の一種である「拋家髻」が誕生し、王朝末期における都の女性の不安定な心境を表現した。孫寿の装いから流行した「墮馬髻」は、晋代に「墮馬髻」の形態を受け継ぐ「倭墮髻」に代替されたが、晋末から南北朝、唐代に再登場し、「倭墮髻」と同時に用いられた。唐代では、孫寿の装いであるという認識のもと「墮馬髻」が用いられ、中・晩唐では、「墮馬髻」が派生した乱雑な「闊掃粧髻」が宮中で行われ、時代の終焉に対するやるせない思いが体现された。漢代の女性の髻の中でも「椎髻」と「墮馬髻」は、後代の長期にわたって受け継がれ、各時代の流行や美意識、人々の心情などに合わせて発展し、受容されている。

キーワード：髻、漢代、髪型、中国古代

はじめに

中国古代の髪型において、その中心となっているのは髻であり、男女ともに行われた。現存する俑や壁画などの図像資料を網羅すると、その多様な形態や装飾性から、特に女性の髻が髪型の発展を担ってきたことが見て取れる。

中国古代の女性の髻に関する主な先行研究には、以下が挙げられる。周汎・高春明（1988）、汪維玲・王定祥（1991）、高春明（2001）、李芽（2004）は女性の髻を総史的に述べており¹⁾、五味（1988）および桐島（2008）の研究は、唐代の女性の髻について考察したものである²⁾。髻の基礎は漢代に築かれたとされているが、これまで漢代の女性の髻を中心に考察したものは見受けられない。そこで本研究では、漢代の女性の髻に焦点をあて、その特徴を明らかにし、後代への影響について考察することを目的とする。

研究方法について、漢代の髻に関しては、文献史料に形態に関する記述が乏しいことや、現存する図像資料とともに発掘された竹簡などに記載が見られないこともあり、文献史料に記された髻と図像資料の髻を合致させることは困難であるため、本稿では図像資料は

用いないこととする³⁾。従って、正史、詩詞、小説などの文献史料をもとに、漢代の女性の髻の名称や種類、形態、使用者などを整理・分析し、後代に見られる女性の髻との比較・考察を行う。

1. 漢代の女性の髻の種類と特徴

漢代の女性の髻についてはまず、後代の宇文士及『粧台記』⁴⁾（隋～初唐）および段成式『髻鬟品』⁵⁾（晩唐）から紐解くことができる。

『粧台記』には、漢代に行われた髻について次のように列記されている。

始皇宮中悉好神仙之術、乃梳神仙髻、皆紅粧翠眉、漢宮尚之、後有迎春髻、乗雲髻、時亦相尚、漢武就李夫人取玉簪搔頭、自此宮人多用玉、時王母下降、從者皆飛仙髻、九環髻、遂貫以鳳頭釵、孔雀搔頭、雲頭篋以玳瑁為之、漢明帝令宮人梳百合分髻、同心髻

「神仙髻」は、始皇帝の時代から行われていたもので、漢代でも引き続き宮中の女性に好まれ、白粉と頬

紅を使った「紅粧」と呼ばれる化粧と石黛で描いた「翠眉」とともに用いられていたことがわかる。「迎春髻」「乗雲髻」は、武帝が寵愛した李夫人や当時の宮人が行っており、李夫人は玉製の簪である「玉簪搔頭」を挿し、宮人は「玉」を装飾したと述べられている。「飛仙髻」「九環髻」は、武帝の母・王夫人の従者が用いた髻で、「鳳頭釵」「孔雀搔頭」という簪や「雲頭篋」という梳き櫛を飾ったようである。「百合分髻髻」「同心髻」は、明帝の時代の宮人によって行われている。

また『髻鬢品』には、以下のように漢代の髻について述べられている。

漢有迎春髻、乗雲髻、王母降武帝宮、從者有飛仙髻、九環髻、漢元帝宮中有百合分髻髻、同心髻（中略）合德有欣愁髻

『髻鬢品』にも、「迎春髻」「乗雲髻」「飛仙髻」「九環髻」「百合分髻髻」「同心髻」が見られ、ここでは「百合分髻髻」と「同心髻」は、元帝の時代の宮人が行っていたとされている。また「欣愁髻」は、成帝の昭儀・合德が行っていた髻であったとしている。

次に、『後漢書』明徳馬皇后紀に引く『東漢記』によると⁶⁾、明帝の皇后・馬皇后が行っていた髻は「四起大髻」であることがわかる。

東漢記曰：明帝馬皇后美髮、為四起大髻、但以髮成、尚有余、繞髻三匝

その形態は、髻を作り、その周りに余った髪を3周巻き付けたものであったと述べられている。

『後漢書』五行志に引く『梁冀別伝』には⁷⁾、

梁冀別伝曰：冀婦女又有不聊生髻

と記されており、後漢の政治家である梁冀の妻・孫寿が、後述する「墮馬髻」の他にに行っていた髻として「不聊生髻」が挙げられている。

さらに、崔豹『古今注』⁸⁾（晋）および馬編『中華古今注』⁹⁾（五代・後唐）によれば、以下のように、高祖時代の宮人は「奉聖髻」、武帝時代の宮人は「十二髻髻」を結っていたことがわかる。

至漢高祖、又令宮人梳奉聖髻、武帝又令梳十二髻髻、又墮馬髻

次に、「椎髻」という髻が挙げられる。『漢書』陸賈伝に¹⁰⁾、

高祖使賈賜佗印為南越王、賈至、尉佗魑結箕踞見賈

とあり、服虔注に「魑音椎」と説明され、また顔師古注には、

結読曰髻、椎髻者、一撮之髻、其形如椎

と述べられている。形態としては、「椎髻」が一つにまとめた髻で、物を叩く道具である“つち”の形をしていることが判断できる。『漢書』貨殖伝には¹¹⁾、

程鄭、山東遷虜也、亦冶鑄、賈魑結民、富埒卓氏

と見えている。加えて、『漢書』西南夷伝に¹²⁾、

靡莫之属以十数、滇最大、自滇以北、君長以十数、邛都最大、此皆椎結、耕田、有邑聚

とあり、その顔師古の注では、

椎音直追反、結読曰髻、為髻如椎之形也、陸賈伝及貨殖伝皆作魑字、音義同耳

と説明される。また『後漢書』西南夷伝では¹³⁾、

西南夷者、在蜀郡徼外、有夜郎国、東接交趾、西有滇国、北有邛都国、各立君長、其人皆椎結左衽、邑聚而居、能耕田

と述べられている。つまり、上記の『漢書』貨殖伝と『漢書』西南夷伝、および『後漢書』西南夷伝の記述によると、「椎髻」が西南夷の種族、すなわち夷狄が平素に行う髻であったということも確認できる。また、『後漢書』梁鴻伝に¹⁴⁾、

乃更為椎髻、着布衣、操作而前

と見える。この記述は、文人で隠者である梁鴻が孟光を妻として迎えた時の話の抜粋である。妻・孟光が結婚におよび着飾って嫁ぐと、梁鴻に7日経っても相手にされなかったことから、何か至らない点があったの

かと思ひ謝罪すると、「共に山に隠れ住むような人を妻にと望んでいた」と聞かされたため、彼女は椎髻を結い、麻の衣服に着替えた。すると梁鴻は「それでこそ本当の私の妻だ」と大変喜んだという。ここからはまず、当時「椎髻」が質素な装いとして認識されていたことが読み取れる。

そして、『後漢書』五行志、『後漢書』梁冀伝と梁冀伝に引く『風俗通』に「墮馬髻」が確認できる。『後漢書』五行志には¹⁵⁾、

桓帝元嘉中、京都婦女作愁眉、啼粧、墮馬髻、折要歩、齟齬笑、所謂愁眉者、細而曲折、啼粧者、薄拭目下、若啼處、墮馬髻者、作一邊、折要歩者、足不在體下、齟齬笑者、若齒痛、樂不欣欣、始自大將軍梁冀家所為、京都歛然、諸夏皆放效、此近服妖也

と述べられており、『後漢書』梁冀伝と梁冀伝に引く

『風俗通』には¹⁶⁾、以下のように記されている。

壽色美而善為妖態、作愁眉、啼粧、墮馬髻、折要歩、齟齬笑、以為媚惑

風俗通曰：愁眉者、細而曲折、啼粧者、薄拭目下若啼處、墮馬髻者、側在一邊、折要歩者、足不任體、齟齬笑者、若齒痛不折忻、始自冀家所為、京師翕然皆放效之

記述からは、「墮馬髻」が片側に作られた髻、片側に傾斜した髻であることがわかる。また「墮馬髻」が、細く曲折して描かれる愁いを帯びた「愁眉」や、目の下の部分だけ白粉を薄くして涙を流したように見せる「啼粧」という化粧、および腰を折ったように歩く「折要歩」や歯痛のように笑う「齟齬笑」といった所作と組み合わせられて用いられたとされる。この「墮馬髻」と「愁眉」「啼粧」「折要歩」「齟齬笑」とを組み

表 1 漢代の女性の髻

名称	形態	使用者	その他の特徴	史料
①神仙髻	不明	宮中の女性	「紅粧」「翠眉」と併用	宇文士及『粧台記』
②迎春髻	〃	武帝の妃・李夫人	「玉簪搔頭」「玉」と併用	宇文士及『粧台記』 段成式『髻鬟品』
③乗雲髻	〃	武帝期の宮人		
④飛仙髻	〃	武帝の母・王夫人の	「鳳頭釵」「孔雀搔頭」	
⑤九環髻	〃	従者	「雲頭篋」と併用	
⑥百合分髻髻	〃	《元帝期の宮人》	なし	
⑦同心髻	〃	《明帝期の宮人》		
⑧欣愁髻	〃	成帝の昭儀・合德	〃	段成式『髻鬟品』
⑨四起大髻	髻を作り、その周りに余った髪を3回巻きつけたもの	明帝の後・馬皇后	〃	『後漢書』明德馬皇后紀に引く『東漢記』
⑩不聊生髻	不明	梁冀（政治家）の妻・孫寿	〃	『後漢書』五行志に引く『梁冀別伝』
⑪奉聖髻	〃	《高祖期の宮人》	〃	崔豹『古今注』
⑫十二鬟髻	〃	《武帝期の宮人》	〃	馬縞『中華古今注』
⑬椎髻	つちの形 1つにまとめた髻	《夷狄》 《庶民》 梁鴻（隠者・文人）の妻・孟光	平素または質素な装い	『漢書』陸賈伝・貨殖伝・西南夷伝 『後漢書』西南夷伝・梁鴻伝
⑭墮馬髻	片側に作った髻 片側に傾斜した髻	《武帝期の宮人》 梁冀の妻・孫寿 桓帝期の都の女性 《桓帝期の中国本土すべての人々》	「愁眉」「啼粧」「折要歩」「齟齬笑」と併用 美しく、なまめかしく、媚びる風情のある装い	『後漢書』五行志・梁冀伝 崔豹『古今注』 馬縞『中華古今注』 宇文士及『粧台記』 段成式『髻鬟品』 温庭筠「瑟瑟釵」

注：使用者の《 》は男性を含む

合わせた、弱々しい姿を象徴するような装いは、政治家である梁冀の妻・孫寿が始めたものであり、桓帝の時代、都の女性にとどまらず、国内すべての女性が真似をし¹⁷⁾、当時は美しく、なまめかしく、媚びる風情がある装いと認識されていたことがわかる。装いを構成する「墮馬髻」自体に対しても同様の認識が与えられていたと考えられる。

以上のように、文献史料からは計 14 種類の髻が確認された。これら漢代の女性の髻の名称、形態、使用者、その他の特徴などについてまとめたものを表 1 に示す。

2. 漢代の思想と髻

漢代は、神仙思想が隆盛していた時代であり、神や仙人、不老不死を信仰し、自らも昇仙することを願った。当時の昇仙信仰を明示する資料として、以下に『淮南子』の記述を取り上げる。

『淮南子』原道訓¹⁸⁾には、

昔者馮夷大丙之御也、乗雲車、入雲蜺（中略）
蹈騰昆侖、排闔闔、淪天門

とあり、出御した神が天上界へ帰還する様子について、雲の車に乗って崑崙山に登り天門に入ると記されている。『淮南子』覽冥訓¹⁹⁾では、神の出御が次のように述べられている。

乗雷車、服駕應龍、騶青虬、援絶瑞、席蘿圖、
黄雲絡（中略）登九天、朝帝於靈門

雲を引き綱に、翼を持つ応龍と角のない龍の虬が引く雷の車に乗って出御し、天へと上っている。また、『淮南子』地形訓²⁰⁾には、伝説上の神山である崑崙山に関して、

昆侖之丘、或上倍之、是謂涼風之山、登之而不死、
或上倍之、是謂懸圃、登之乃靈、能使風雨、或上
倍之、乃維上天、登之乃神、是謂太帝之居

と述べられており、不死、霊、天上の神となる三段階の高さをそなえているとする。このように崑崙山の構造を具体的に述べていることから、神仙思想や信仰心の強さを読み取ることができる。

すなわち、当時の神仙思想では、龍の引く車などに

乗り、神山を通過して天上へとのぼることができれば、不死や神仙になると考えられており、昇仙を追求していた。本研究においては、漢代の女性の髻として 14 種類を抽出したが、このうち「神仙髻」と「飛仙髻」は、その名称からも神仙思想が反映された髻であることは明かである。また、神仙思想における天上へと向かう昇仙の過程では、必ず雲が存在する。上記『淮南子』原道訓および覽冥訓の記述にも雲の車と引き綱が登場しており、昇仙信仰と雲は密接に関係している。加えて、馬王堆漢墓の出土品をはじめ、漢代のあらゆる遺物に雲気文が装飾されており、過剰な雲気文の使用から、当時は奢侈に値すると判断されたほどであった²¹⁾。よって「乗雲髻」もまた、神仙思想と繋がった髻であると判断できる。

「神仙髻」「飛仙髻」「乗雲髻」に関して、残念ながらその形態に関する記述は現在のところ見受けられない。またこの 3 つの髻は後代には引き継がれていないことが確認できている。

3. 「椎髻」の後代への波及について

漢代で行われた女性の髻のうち、「椎髻」は漢代以降にも用いられていることが認められる。本章では、漢代以降に見られる「椎髻」を取り上げ、比較を通して波及の様相を見ていきたい。

白居易の「時世妝」²²⁾（中唐）という詩には、以下のように「椎髻」が登場している。

時世妝、時世妝、出自城中傳四方、時世流行無遠近、
顰不施朱面無粉、烏膏注唇唇似泥、雙眉畫作八字低、
妍媸黑白失本態、妝成盡似含悲啼、圓鬢無髻椎髻樣、
斜紅不暈赭面狀、昔聞被髮伊川中、辛有見之知有戎、
元和妝梳君記取、髻椎面赭非華風

西域の諸民族との交流が盛んであったことから、当時流行していた胡人の装いとして、頬紅と白粉は塗らず、「烏膏」という黒い油を唇に注し、八字眉を描いて、両頬と鬢髪と眉の間に頬紅で装飾を描く「斜紅」をぼかさずに施し、そして「椎髻」を結う、というスタイルが詠われている。

『新唐書』五行志²³⁾には、次のように述べられている。

元和末、婦人為圓鬢椎髻、不設鬢飾、不施朱粉、
惟以烏膏注唇、狀似悲啼者（中略）唐末京都婦人梳髮、
以兩鬢抱面、狀如椎髻、時謂之拋家髻

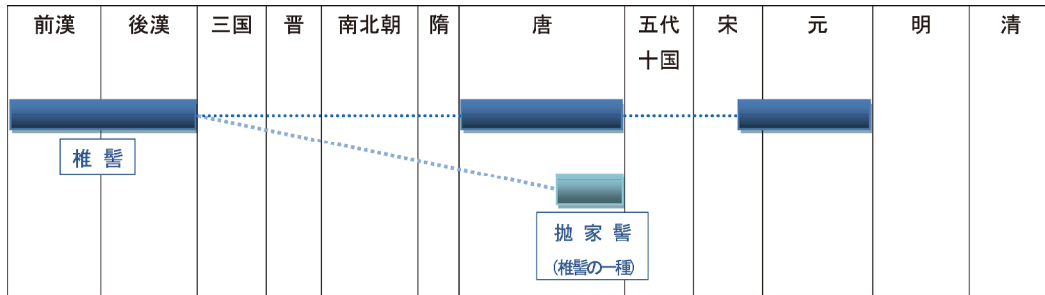


図1 「椎髻」の出現変遷

同じく「椎髻」が胡人の装いとして、「烏膏」のみを注すという化粧とともに用いられている他、唐代末期の都の女性の間で、「椎髻」の一種である「抛家髻」が行われていることがわかる。中国古代において髻が最も豊富であったのは唐代であるが、「抛家髻」のような名称の髻は中・晩唐のみに見受けられる。安史の乱以後、中央政府の勢力が弱まり、律令体制の崩壊期であった社会ならではの髻として、「椎髻」を汲んで誕生したものといえる。

唐代以降、「椎髻」は宋代末から元に見受けられる。モンゴル帝国成立時代の見聞録である彭大雅・徐霆『黒鞬事略』²⁴⁾ (南宋) には、当時のモンゴル民族が「椎髻」を行っていたことが述べられている。

其冠、被髮而椎髻、冬帽而夏笠、婦頂故姑

また元の諸制度について記した葉子奇『草木子』²⁵⁾ (明) には、

其髮或辮、或打紗練椎、庶民則椎髻

とあり、当時のモンゴル民族にとって「椎髻」は庶民の髪型として認識され使われている。

このように「椎髻」は、漢代以後、唐代になって再び出現し、次に宋代末から元代で行われている。また唐代の中・晩唐期には、「椎髻」の一種として「抛家髻」という髻が登場している。「椎髻」の出現の変遷をまとめたものとして、図1を提示する。

4. 「堕馬髻」の影響と派生について

漢代の女性の髻の中では、「椎髻」に加え「堕馬髻」も漢代以降行われていることが確認できる。本章では、漢代以降の「堕馬髻」と照らし合わせながら、「堕馬髻」の影響とその派生の様相について探る。

崔豹『古今注』²⁶⁾ (晋) には、

堕馬髻今無復作者、倭堕髻、一云堕馬之余形也

と見えており、「堕馬髻」は晋代では結う者はなく、「堕馬髻」の形態を残した「倭堕髻」が行われていると述べられている。「倭堕髻」が次の南北朝時代にも引き続き行われていることは、以下の徐伯陽の詩「日出東南隅行」²⁷⁾ (南北朝) から確認することができる。

羅敷粧粉能佳麗、鏡前新梳倭堕髻

しかし、高允の詩「羅敷行」²⁸⁾ (晋末～南北朝) には、

頭作堕馬髻、倒枕象牙梳

と詠われ、徐陵『玉台新詠』の序²⁹⁾ (南北朝) には、

粧鳴蟬之薄鬢、照堕馬之垂鬢、反挿金鈿、横抽宝樹

と述べられており、さらに沈約の詩「江南曲」³⁰⁾ (南北朝) にも、

羅衣織成帶、堕馬碧玉簪

と「堕馬髻」が詠われていることから、晋代末から南北朝にかけて、「堕馬髻」が再び行われるようになったことが認められる³¹⁾。

そして唐代においても、「倭堕髻」と「堕馬髻」は同時に行われている。許景先の詩「折柳篇」³²⁾ (初唐～盛唐) には、

宝釵新梳倭堕髻、錦帶交垂連理襦

とあり、温庭筠の詩「南歌子」³³⁾ (晚唐) には、

倭墮低梳髻、連娟細掃眉

と「倭墮髻」が詠まれている。張昌宗の詩「太平公主山亭侍宴」³⁴⁾（初唐）では、

扇掩將雛曲、釵承墮馬髻

と見え、李頎の詩「緩歌行」³⁵⁾（初唐～盛唐）には、

二八蛾眉梳墮馬、美酒清歌曲房下

と詠われ、白居易の詩「代書詩一百韻寄微之」³⁶⁾（中唐）においても、

風流誇墮髻、時世闢啼眉

とあり、「墮馬髻」が詠まれている。この白居易の詩によれば、「墮馬髻」は当時「墮髻」ともいわれていることがわかり、さらに自注には、

貞元末、城中復為墮馬髻、啼眉粧也

と記されている。つまり、城中で再び「墮馬髻」と「啼眉粧」という装いが行われているとしている。自注で「復」（＝再び）と述べているのは、漢代に孫寿が生み出し流行した、「墮馬髻」と「啼粧」などを組み合わせた装いの再来という意味と捉えることができる。

また、『粧台記』³⁷⁾に、

古今注云、長安作盤桓髻、惊鵲髻、復作倭墮髻、一云梁冀妻墮馬髻之遺狀也

と記されていることや、『髻髻品』³⁸⁾に見られる、

漢梁冀妻作墮馬髻

という一文が示すように、唐代では、漢代の孫寿と孫寿の考案した髻を含むトータルの装いがしっかりと伝えられていることが理解でき、孫寿と「墮馬髻」の関係性が確立されていることがうかがえる。

温庭筠の詩「瑟瑟釵」³⁹⁾（晩唐）にも、以下のように、孫寿と「墮馬髻」が詠まれている。

墮雲孫寿有余香

中・晩唐期になると、「墮馬髻」の一種として「開掃粧髻」が登場している。『髻髻品』⁴⁰⁾には、

貞元中有婦順髻、又有開掃粧髻

と見え、楊慎『荊林伐山』⁴¹⁾（明）には、

開掃、髻名、亦猶盤雅、墮馬之類也

開掃妝、唐末宮中髻名、形如炎風亂鬢

と述べられている。『荊林伐山』によれば、「墮馬髻」に属す「開掃粧髻」は宮中で行われる髻であり、非常に乱雑な形状であることがわかる。唐末には他にも乱雑な髻がいくつか見受けられるが、「墮馬髻」の流れを汲んだ「開掃粧髻」もまた、魏晉南北朝以来続いてきた貴族制社会の終焉期を象徴する髻であるといえる。

その後、「墮馬髻」は明代に現れている。范濂『雲間據目抄』⁴²⁾（明）によれば、

蝶髻髻皆後垂、又名墮馬髻

とあり、「墮馬髻」が明代には「蝶髻髻」とも呼ばれていることがわかる。

このように「墮馬髻」は、漢代で流行した後、晋代末期から南北朝にかけて再び登場し、次に唐代で行われている。次に見られる明代では異名を持ち合わせた。晋代には「墮馬髻」の形態を残した「倭墮髻」が用いられ、晋代末期から南北朝には「墮馬髻」と重ねて行われており、唐代でも同時に用いられている。また中・晩唐には、「墮馬髻」から派生した「開掃粧髻」が見られる。「墮馬髻」の漢代からの変遷をまとめたものとして、図2を提示する。

おわりに

本稿では、漢代の女性の髻の特徴を明らかにすべく、文献史料をもとに、その名称や種類、形態、使用者などについて整理・分析するとともに、後代の女性の髻と比較・参照を行い、漢代の女性の髻の影響について考察を試みた。

文献史料から漢代の女性の髻を計14種類抽出することができ、中でも「神仙髻」「飛仙髻」「乗雲髻」は、神仙思想が最盛期を迎えていた漢代を象徴する髻であったといえよう。また「椎髻」と「墮馬髻」は、後代にも引き続き行われていることが確認された。

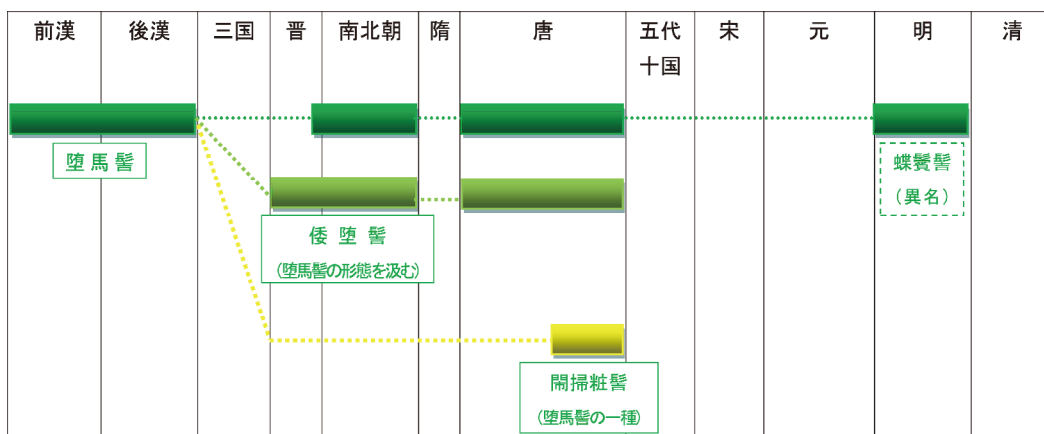


図2 「墮馬髻」の出現変遷

漢代で夷狄が行った、つち形をした「椎髻」は、唐代に至って再登場しており、当時流行の胡風趣味に採用されていることがわかった。次に宋代末から元代においてはモンゴル民族に用いられており、「椎髻」は漢代より変わらず異民族の髪型として認識され採用されてきた髻であるといえる。一方、中・晩唐には、「椎髻」を受け継いだ「拋家髻」が誕生しており、王朝末期における都の女性の不安定な心境を表現する髻として機能していたと推察される。

孫寿のトータルコーディネートの装いから流行した、片側に傾斜した「墮馬髻」は、晋代末から南北朝にかけて再び現れ、唐代では、孫寿と孫寿考案の装いが浸透している状況および認識のもとで「墮馬髻」が結われていたことが読み取れる。明代には「蝶髻髻」という異名も備えて再び出現しており、「墮馬髻」の波及力の強さがうかがえる。また、晋代においては、「墮馬髻」の形態を受け継ぐ存在、「墮馬髻」の代替的存在として「倭墮髻」が行われており、晋代末から南北朝、そして唐代においては、「墮馬髻」と「倭墮髻」が同時に用いられていることがわかった。中・晩唐では、「墮馬髻」の一種として「開掃粧髻」が行われるようになり、「椎髻」の場合と同様、時代の末期を迎える宮中の女性のやるせない思いを体現する役割を果たすために派生されたのではないかとと思われる。

漢代の女性の髻において、特に「椎髻」と「墮馬髻」は、後代の長期にわたって受け継がれており、各時代の流行や美意識、人々の心情などに合わせて発展しながら、受容されてきたことが理解できる。

本稿は、日本家政学会関西支部第33回（通算89回）研究発表会（2011年10月 於滋賀県立大学）における口頭発表の内容に加筆・修正したものである。

注

- 1) 周汎・高春明『中国歴代婦女粧飾』、三聯書店、1988年
汪維玲・王定祥『中国古代婦女化粧』、陝西人民出版社、1991年
高春明『中国服飾名物考』、上海文化出版社、2001年
李芽『中国歴代粧飾』、中国紡織出版社、2004年
- 2) 五味充子「唐代婦人像の髪型と服飾」、『民族藝術』4、民族藝術学会、1988年、pp. 58-74
桐島薫子「唐代に伝わった『墮馬髻』と『倭墮髻』—文献と文物の比較から—」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』3、筑紫女学園大学、2008年、pp. 1-15
桐島薫子「孫寿『墮馬髻』流行の社会的背景—白詩に描く唐代ファッションを素材として—」、『白居易研究年報』9、勉誠出版、2008年、pp. 145-167
- 3) 先行研究のほとんどにおいて、根拠を示すことなく文献史料の髻を俑などの図像資料にあてはめている場合が見受けられる。中国古代の髪型の研究にあたっては、現存する図像資料はあくまでも参考として活用するに留められる。
- 4) 宇文士及『粧台記』。香艷叢書 三集 卷一（上海書店）。
- 5) 段成式『髻鬟品』。香艷叢書 三集 卷一（上海書店）。
- 6) 『後漢書』卷十上 皇后紀第十上 明德馬皇后紀。中華書局本。
- 7) 『後漢書』志第十三 五行一 服妖。中華書局本。
- 8) 崔豹『古今注』卷中。四部叢刊本。

- 9) 馬縞『中華古今注』巻中。古今逸史本。
- 10) 『漢書』巻四十三 酈陸朱劉叔孫伝第十三 陸賈伝。中華書局本。
- 11) 『漢書』巻九十一 貨殖伝第六十一。中華書局本。
- 12) 『漢書』巻九十五 西南夷兩粵朝鮮伝第六十五 西南夷伝。中華書局本。
- 13) 『後漢書』巻八十六 南蛮西南夷列伝第七十六 西南夷伝。中華書局本。
- 14) 『後漢書』巻八十三 逸民列伝第七十三 梁鴻伝。中華書局本。
- 15) 『後漢書』志第十三 五行一 服妖。中華書局本。
- 16) 『後漢書』巻三十四 梁統列伝第二十四 梁冀伝。中華書局本。
- 17) 高春明(2001)は、「墮馬髻」はすでに前漢から行われており、孫寿が始めたものではないため、『後漢書』の記述は間違っていると判断している。確かに、崔豹『古今注』、馬縞『中華古今注』の記述によれば、前漢の武帝時代にすでに「墮馬髻」が行われていたことは明らかであるが、『後漢書』の記述にある孫寿が始めたというのは、「墮馬髻」のみを指しているのではなく、「愁眉」「啼粧」「墮馬髻」「折要歩」「齟齬笑」という装い全体を指していると考えるべきである。すなわち、後漢になり孫寿が初めて「墮馬髻」と「愁眉」「啼粧」「折要歩」「齟齬笑」を組み合わせた装いを生み出し、それが桓帝時代に大変流行したのである。
- 18) 『淮南子』原道訓第一。諸子集成本 劉文典撰『淮南鴻烈集解』(中華書局 1989年)。
- 19) 『淮南子』覽冥訓第六。諸子集成本 劉文典撰『淮南鴻烈集解』(中華書局 1989年)。
- 20) 『淮南子』地形訓第四。諸子集成本 劉文典撰『淮南鴻烈集解』(中華書局 1989年)。
- 21) 神仙思想と雲の関係、雲気装飾の使用法や表現内容については、以下を参照。
拙稿「漢代雲気文の表現論的考察—長沙馬王堆一号漢墓を中心に—」、『人間文化研究科年報』第20号、奈良女子大学人間文化研究科、2005年、pp. 131-145
拙稿「馬王堆漢墓出土の染織品における雲気文と菱形文について」、『服飾美学』第45号、服飾美学会、2007年、pp. 1-18
- 22) 『全唐詩』巻四二七。上海古籍出版社。
- 23) 『新唐書』志第二十四 五行一。中華書局本。
- 24) 彭大雅・徐霆『黑韃事略』。中華書局本。
- 25) 葉子奇『草木子』巻三 雜制篇。中華書局本。
- 26) 崔豹『古今注』巻中。四庫叢刊本。
- 27) 『樂府詩集』巻二十八 相和歌辭三 相和曲下。四庫全書本。
- 28) 『樂府詩集』巻二十八 相和歌辭三 相和曲下。四庫全書本。
- 29) 徐陵『玉台新詠』序。四庫全書本。
- 30) 『樂府詩集』巻二十六 相和歌辭一 相和曲上。四庫全書本。
- 31) 桐島(2008)は、崔豹『古今注』ですでに「墮馬髻」は行われていないとあるのに、その後の晋末から南北朝時代の文献史料に「墮馬髻」が見えていることに対し、「倭墮髻」と「墮馬髻」は似通っているため、入れ替わって著述されたとしている。しかし、両者が似ていることで入れ替わって著述されたかどうかは証明することができないと思われる。よって本稿では、文献史料に忠実に従い、「倭墮髻」と「墮馬髻」が晋末から南北朝で同時に行われていたと判断する。
- 32) 『全唐詩』巻一一一。上海古籍出版社。
- 33) 『全唐詩』巻八九一。上海古籍出版社。
- 34) 『全唐詩』巻八〇。上海古籍出版社。
- 35) 『全唐詩』巻一三三。上海古籍出版社。
- 36) 『全唐詩』巻四三六。上海古籍出版社。
- 37) 宇文士及『粧台記』。香艷叢書 三集 巻一(上海書店)。
- 38) 段成式『髻鬟品』。香艷叢書 三集 巻一(上海書店)。
- 39) 『全唐詩』巻五八三。上海古籍出版社。
- 40) 段成式『髻鬟品』。香艷叢書 三集 巻一(上海書店)。
- 41) 楊慎『菰林伐山』巻十二 閨掃 閨掃梳頭。中華書局本。
- 42) 范濂『雲間據目抄』巻二。新興書局、1987年。

Study on Hairstyle of Ancient China : Fashion of Women's Chignon in Han Period

Faculty of Liberal Arts, Department of Beauty and Fashion Studies
Natsuko MIZUNO

Abstract

The aim of this study is to focus on hairstyle in Han period when the groundwork for women's chignons were laid, and to find the influence on next age, explaining the feature of women's chignons. Using the literature data of authorized histories of China, poetry and novels, I analyzed the names, kinds, forms and users of women's chignons in Han period. I also compared them with the women's chignons in next age. In the literature date, I found 14 kinds of women's chignons in Han period and I could confirm that there were some women's chignons that reflected original thought in Han period. And in many women's chignons in Han period, "*zhui ji* (椎髻)" and "*duoma ji* (墮馬髻)" were succeeded for a long time in next age. I realized that "*zhui ji* (椎髻)" and "*duoma ji* (墮馬髻)" had expanded and been accepted with the fashion, the sense of beauty and people's heart in every age.

Keywords: chignon, Han period, hairstyle, ancient China